

インテリジェント・デザイン本部がケンブリッジ大学に拠点を建設

普遍的有神論理論の世界的センターがケンブリッジに誕生

Intelligent Design の Discovery Institute (本部シアトル) のスティーヴン・マイヤー代表から、先日、私宛にメールがあり、このニュースを知らせてきた。

まだ資金不足など多少の問題が残っていて、確定ではないが、ほぼ確実のようである。ケンブリッジ大学の世界的伝統を考えれば、これは ID 運動にとって大きな飛躍であり、彼の言う通り「世界を変える」であろう。大学の内部にすでに 2 棟の建物が建造中で、これはこの一角が ID の拠点というより、大学全体が「神仮説」の拠点となるはずである。なぜなら何の研究であれ——自然科学、人文科学、医学、法律、あるいは私のような文学研究であれ、なかんずく芸術活動そのものが——すべて創造者を前提としなければならないからである。これまでの無神論や唯物論は、発展性ある有効な学問でも科学でもなくなる。

ID に対する理不尽で執拗な反論は、明かにその原因を突き止めることのできる、ある根源からきている。反 ID は、現在進行中の世界的問題——ウクライナ、バイデン政権、中国共産党、「闇の勢力」といったもの——を巻き込む、世界を根源から改革しようとする運動に、敵対するものである。

因みに、Stephen Meyer をググってみるとよい。そこには彼の理論を露骨に pseudo-science (似非科学) だと説明する紹介が出てくる。マイヤーの著書はこれまでも、“Books of the Year”で注目されるなどして、ID を支持する科学者は世界的にますます増えている。それにもかかわらず、悪意の解釈が絶えないのは、ID が「政治的にインコレクト(正しくない)」からである。では「政治的にコレクト」な思想は何か？ それは「ダーウィン進化論」である。ということはダーウィン進化論や(文化的)マルクス主義が、彼らにとって命の綱だということである。それは一時期、リチャード・ドーキンスによって、大きく流行したが、その後、誰も論ずる者がなくなった。NHK 番組のタイトル「ダーウィンが来た」にだけ、かろうじてそれが残っている(いない?)。ID 理論の証明については、次の記事をご覧ください。<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/180320.pdf>

「インテリジェント・デザイン」とはどういう考えか？ それはマイヤー氏が手紙で最後に書いている Nature points to a Creator (自然はある創造者を指し示している) という

言い方に、簡潔に表れている。この point to という言い方を、私自身も最初からよく使ってきた。これは prove (証明する)とは違う。なぜなら創造者は、幾何学の証明のように、存在を「証明」できるものではない。創造者(神、神々)は確実に存在するものでありながら、未知のものでもある。ID の design は「方向」「計画」の概念を内包し、我々を導くものである。我々はそれに向かって生きている。我々の職業が何あってもよい。特定の技師、職人、医者、教師、スポーツ選手、何でもよい。我々はそれぞれ、楽しんで進むべき道を与えられ、道徳を自然のものとして与えられている。

ID に敵対する者たちの考えとは全く逆に、我々と神々は別々でなく、「分け御霊」という言葉が示すように、一体のものとして生きている。アインシュタインは面白い言い方をした——「この世界で最も理解できないことは、それが理解できることだ…」その理由は、この宇宙と我々の頭脳が、一体のものとして創られているからだと考えられる。我々が苦しみ悩んでいとき、解答が向こうからやってくることもある。

こうしたことを否定する者が陥る、不幸な例がある。中国共産党は、ベートーベンの「第九」は、宗教的な感情を起こすから禁止すべきだ、と言ったらしい。もしこれが本当だとしたら、これほど見事に転倒した人民の指導はない。あたかもそれは、死と生を取り違えているかのようである。(しかし実は、バイデン政権も、それとあまりかわらないことを言っている。)第九の「合唱」に加わった人なら、あのシラーの「歓喜の歌」の一節、wir betreten feuertrunken himmlische dein Heiligtum を知っているだろう。その感動から私は、このような俳句を得た：

春宵に酔い天のきざはしを行く

あと一週間ほど待ってみるがよい。11月8日の米中間選挙戦には、トランプ党からのバイデンに対する復讐の票が、イーロン・マスクのツイッター改革という英雄的な決断と相俟って、この腐った世界の根にあったものを一掃すべく、大量に投じられるだろう。もちろんこれは希望的な観測であって、これには時間がかかる。しかしその一歩が始まることは間違いない。

私は2003年1月から2008年12月にかけて、6年間、72回の連続エッセーを「世界思想」という雑誌に書いた。これはアメリカで起こりつつある、この画期的な運動を、Intelligent Design という名が固定する前から、自分のアンテナで嗅ぎ出して、書き始めたものである。題は一貫して「人間原理の探究」であった。

したがってこれは、アメリカで起こっていることを、リアルタイムでニュース報道のように書いたものであって、私の写真が Discovery Institute の人々と並んで載ったこともある。

その頃、ダーウィンの『種の起源』150年記念と称して、読売新聞（他紙は知らない）が、2009年に、4面に渡る大げさな記事を載せた。これは明らかに、当時、迫害を受けながらも確実に起こりつつあるID運動を牽制するためのものだった。その頃アメリカでは、特に高校の理科教師が、IDを学生に教えたとして、次々に解雇される事件が起こっていた。当時はおそらく誰もが、これを単なる偏見か無理解によるものと思っていたが、今にして思えば、これは明らかにCIAという、新聞を牛耳る悪党どもの教唆によるものだった。

今、かつて陰謀と言われていたものが、陰謀でも何でもなく、大っぴらな犯罪として堂々と人々を苦しめている。彼ら陰謀団、少数の国際金融資本家と言われる者たちが、最も恐れるのは宗教であって、兵器やAI戦略の競争ではない。しかしこれは宗教というより、IDの言うような、普遍的な有神論であり、その理論が「指し示す」創造者、すなわち自分自身の「魂」の存在に、人々が目覚めることの恐れである。彼らは民衆を、魂を抜かれた「ゾンビ」状態にしておかねばならないのである。人間への復讐は神への復讐である。この宇宙に目的も方向もなければ、我々の生きる目的も方向もないことになる。これを忘れてはならない。

私はIDの「ディスカバリー研究所」を真似て、それに似た、しかし独自の性格をもつ研究グループを創るべきだと考えた。そしてその名を「創造デザイン学会」とすることに決めた。そのときに集まってくれたのが、よく話が通じ、頭脳すぐれた若い人々だった。私は彼らの協力によって、数冊の著書、訳書を出版した。それらを含め、私の著書のほぼすべては、『ザ・シンクロニシティ・キー』の著者紹介欄に入っている。

これは協力というより、私の指導によるものなので、出版費用は私持ちだった。ウェブサイトとしての「創造デザイン学会」では、現在、私は本名を使わず、ペンネームのGreatchainを使っている。これは隠すためではなく、最初に利用していた「アメブロ」の習慣に従ったものであり、「売名」を望まないからでもある。著書の内部にはもちろん、私の名前が明記してある。